下関市域の方言状況

―一九八九年調査の報告―

岡野信子

はじめに

一九八九年と九〇年の二か年にわたって、私ども（日本語研究ゼミの学生と私）は下関市域と北九州市域の方言調査をおこなっている。中国・九州接境域の方言状況を明らかにすることがその目的である。

八九年調査は、調査地点、下関市三十地点、北九州市三十五地点、話者は土地っ子の七十歳前後の男性と中学二年男子、調査項目は九十七である。九〇年調査は北九州市がわで四地点をふやし、話者は七十歳前後の女性と高校二年女子である。調査項目は八九年調査のものにいくらかの入れ替えをおこなって百項目とした。

八九年調査で得たものは、高橋浩子・内藤啓子・平岩志保が卒業論文資料として地図化し筆者がこれを補訂したが、『言語地図』として刊行していない。九〇年調査のものは、九一年三月には『下関市北九州市言語地図』として発行の予定で、目下、作業を進めている。

この稿では、八九年調査にもとずいて下関市がわの方言状況を報告し、その状況の語るところを考えてみたい。八九年調査項目は以下のとおりである。その番号は、音声、表現法、語彙の順に整理して施したもので、調査番号は項目の下の括弧内に記した。

調査項目

1 汗（66）
2 風（56）
3 座ぶとん（51）
4 雑巾（53）
5 大根（63）
6 早い（46）
7 出してみろ（69）
8 出してみろ（69）
9 起きろ（91）
10 元気だねえ（16）
11 元気じゃない（17）
12 元気だった（18）
13 あちらへ（35）
14 人に笑われる（47）
15 今、行くから（38）
16 誰の物か（24）
17 どこに行くのか（36）
18 百円分（23）
19 本ばかり読んでいる（94）
20 行かせる（28）
21 行かせない（30）
22 行かせた（29）
23 行ったそうだ（39）
24 今にも降りそうだ（57）
25 降っているようだ（58）
26 行かなかった（34）
27 洋服が小さくなったから着ることができない（80）

28 三歳になったがまだひとりで着ることができない（79）
29 行きたくない（32）
30 私は行くまい（31）
31 そんなことはあるまい（42）
32 行ってみなければわからない（40）
33 行かねばならない（33）
34 そんなことをしてはいけない〈やさしい禁止〉（88）
35 そんなことをするな〈きびしい禁止〉（89）
36 運動会がアリヨル（65）
37 子供が本を読んでいる（67）
38 今にも木から落ちそうだった（85）
39 文末詞、タイ・テー・イ（44）
40 先に行くゾナ（37）
41 先生が言われた（9）
42 先生が立っておられる（8）
43 貸してください（10）
44 訪問のあいさつ〈目上〉（1）
45 訪問のあいさつ〈友人〉（2）
46 迎えのあいさつ〈目上〉（3）
47 見送りのあいさつ〈目上〉（4）
48 物をもらった時のお礼のあいさつ（5）
49 ああ、そうですか〈うなずき〉（6）
50 オランオランバー〈幼児をあやすことば〉（82）
51 いい子、いい子（頭をなでながら言うことば）
52 二時を基準にした、一時五十五分の言いかた（48）
53 「電話がかからなかったか」の答（応答詞「ハイ」「イーエ」に注意）（41）
54 自称詞
55 この人（15）
56 あの人（14）
57 分家（49）
58 親友（50）
59 いたずらっ子（83）
60 おてんば（84）
61 怠け者（95）
62 働き者（96）
63 肩車（74）
64 お手玉（75）
65 半人前（78）
66 舌（68）
67 つば（唾）（70）
68 ふくらはぎ（71）
69 十二月三十一日（92）
70 仏飯（52）
71 井戸（61）
72 前庭（54）
73 稲むら（62）
74 彼岸花（64）
75 お前にやる（11）
76 私にくれ（12）
77 東京から帰ってくる（25）
78 東京に帰る（27）
79 手伝う（26）
80 箒ではく（55）
81 叫ぶ（86）
82 寄りかかる（72）
83 あぐらをかく（73）
84 腹をたててふくれる（93）
85 叱る（90）
86 雨戸をしめる（60）
87 仲間に入れてくれ（76）
88 買いおきの菓子がなくなった（22）
89 雨にぬれて気持ちがわるい（59）
90 子供がさわいでうるさい（87）
91 この問題は容易である（45）
92 疲れて「ああ苦しい」（19）
93 歯が痛い（20）
94 ああ、おなかがすいた（21）
95 ずるい（77）
96 非常に（7）
97 全然（43）

この九十七項の、主として老年層図上の方言状況を、一、事象の分布状況、二、注目される諸事象、三、新化の遅速、のように考察する。少年層図にふれる時は〈少〉とする。

一　事象の分布状況

(一)　九州事象と中国（中国・四国）事象とがともに分布する状況

一図の上に、九州を主分布域とする事象と中国（中国・四国）を主分布域とする事象とがともに分布して、優劣をさまざまに見せる図が多い。方言接境域ならではの状況である。

1　九州事象と中国事象の拮抗する状況

24　降りそうだ・25　降っているようだ・29　行きたくない

「降りそうだ」を言うおもな事象は「フローゴト　アル」と「フリソーナ」で、両者が一地に併存する状況もあり、ともに優勢である。「降っているようだ」の図上では、「〜ゴト　アル」が「〜ヨーナ」よりやや優勢、「〜ヨーニ　アル」も二地にある。『表現法の全国的調査研究―準備調査の結果による分布の概観』[1]の、「26　こっちの方がどうも良さそうだ」では、「〜ゴタル」は九州のほぼ全域と山口県の一地に分布、「〜ソーナ」、「〜ヨーナ」は中国・四国分布である。

「29　行きたくない」の「イコーゴト　ナイ」は、多くは「イキトー　ナイ」と併存で、「イキトー　ナイ」より劣勢である。「イキトー　ナイ」は西日本の広域分布事象で、当然、九州域にも分布するが、「〜ゴト　ナイ」は九州色の濃い表現である。

10　元気だ・11　元気じゃない・12　元気だった

「元気だ」の図上には「元気ナ」「マメナ」と、「〜ジャ」「〜ヤ」とがほぼ同勢力で分布している。「元気じゃない」の場合は「ゲンキニ　ナイ」が三地に、「マメデ　ナイ」が二地に、その他は「〜ジャ　ナイ」である。そして「元気だった」では、「ゲンキナカッタ」、「マメナカッタ」がかなりあり、そのほか「〜ニ　アッタ」、「〜ニ　シチョッタ」、「〜ジャッタ」と事象が多い。

ところで『方言文法資料図集』[2](1)の「53　静かだ」図上には、「シズカナ」が中国・四国分布、「シズカジャ」は「〜ヤ」の近畿を除くほぼ全域にある。また「50　静かでない」には、「シズカニナイ」が、山口県・岡山県に見え、「シズカジャ　ナイ」は関東以西に広く分布している。このような全国状況と比較する時、さきに見た下関市域での分布状況は、より広域分布の事象と中国分布事象との拮抗する状況と見ることができる。

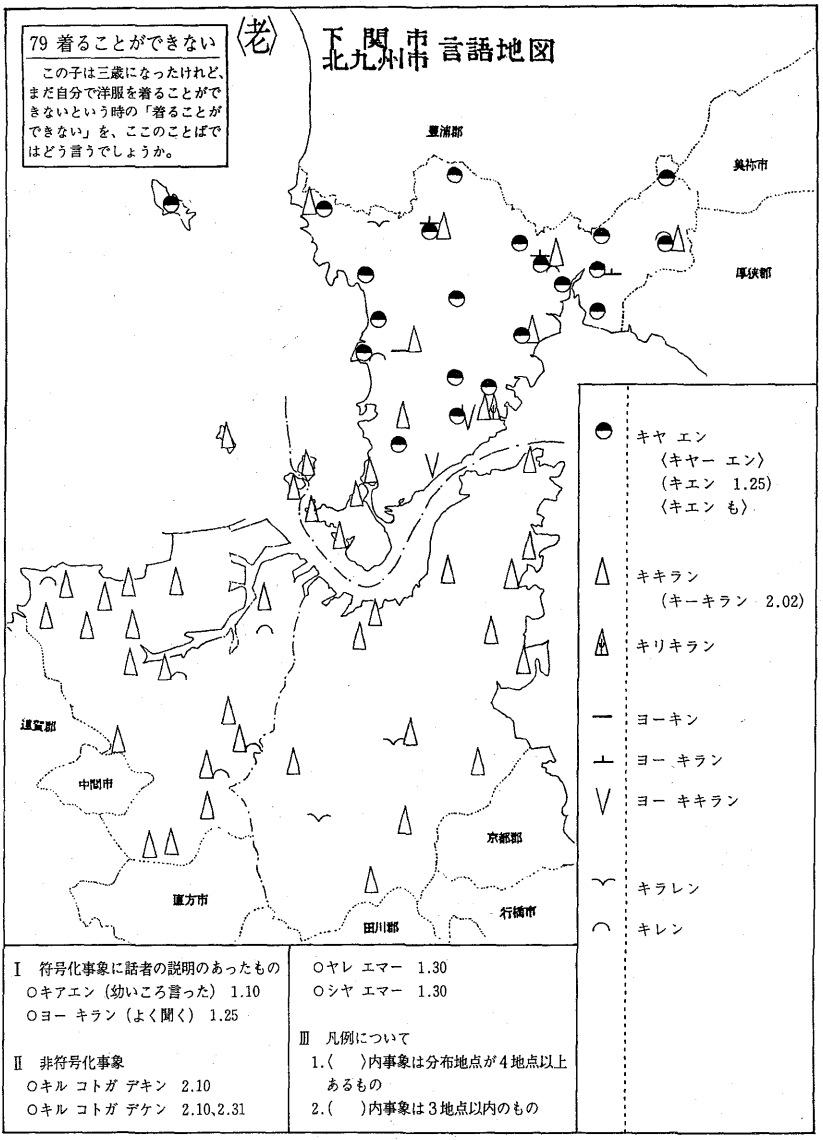
97　全然

これには多くの事象が答えられているが、下関市域にもっとも多いのは「カイサラ」と「ヒトツモ」である。『日本方言大辞典』によれば「カイサラ」は豊浦郡、「カイサ」は山口県と島根県の事象である。一方、「ヒトツモ」の分布地は、『日本国語大辞典』によれば福島県・新潟県・近畿・四国・大分県などかなり広いようであるが、今回の私どもの調査では、北九州市域では「ヒトツモ」がおもな事象で、これが下関がわにも広がったかに見える。

2　九州事象がより優勢な状況

28　着ることができない（能力不可能）

図に見られるように、「三歳になったが、まだ自分で洋服を着ることができない」の表現としてもっとも優勢なのは、「キャエン」（着は得ぬ）である。これは対岸の北九州市域にはまったく見られないが、『表現法の全国的調査研究』38図上には、長崎県・佐賀県



Ⅰ 符号化事象に話者の説明のあったもの
○キアエン (幼いころ言った) 1.10
○ヨー キラン (よく聞く) 1.25

Ⅱ 非符号化事象
○キル コトガ デキン 2.10
○キル コトガ デケン 2.10,2.31
○ヤレ エマー 1.30
○シヤ エマー 1.30

Ⅲ 凡例について
1.( )内事象は分布地点が4地点以上あるもの
2.( )内事象は3地点以内のもの

に分布している。山口県下は豊関域に調査地点がないためにこれが見えていないが、下関市域の「キャエン」は長崎・佐賀の分布に連なるものであろう。両県のまとまった分布のほかに、中部地方以西に点々とこの系統の事象が見えているのは、これが古い事象であることを物語っている。

「キャエン」についで優勢な「キキラン」も九州事象である。「キキラン」については、〝新しいことば〟という自覚が話者たちにあった。北九州市域にもっとも近く、漁業などでの交渉も深かった彦島地区（現在は橋でつながっているが以前は島）、六連島が「キキラン」一色であるのは、このあたりから新しく入ってきて「キャエン」にとってかわったのであろう。

ところで「ヨー　キン」は近畿・中国・四国および宮崎県南東辺にも見える優勢な事象であるが、下関市域にはこれがわずか一地に見えるばかりである。三地に見える「ヨー　キラン」は、九州に優勢なラ行五段化事象の「キラン」の上に「ヨー」を置いたものであり、「ヨー　キキラン」の「キキラン」はすでに述べたように九州事象である。すなわち、東から伝播した事象がここで九州化される状況も見えているのである。

26　行かなかった（打消過去）

「イカンジャッタ」がもっとも優勢で「〜ンヤッタ」がこれに次ぐ。「〜ダッタ」（ざった）、「〜ジャッタ」、「〜ンザッタ」、「〜ンダッタ」はそれぞれ一、二の地点に見えるにすぎない。新来の「〜ンカッタ」も四地にあり、〈少〉ではこれの分布地点がおおいにふえている。『表現法の全国的調査研究』の「18　今日は役場に行かなかった」の図によれば、「ザッタ」、「ダッタ」は西中国、西四国事象で、「〜ンジャッタ」は九州・山口県事象である。

54　自称詞

ほぼ全地点に分布しているのは九州に優勢な「オレ」、「オドモ」である。「オダン」が七地で得られているが、『日本方言大辞典』によれば、これは出雲ことばである。近畿・中国に優勢な「ワシ」は、下関市域では多くは「オレ」と併存で十三地点に分布するばかりで、「オレ」、「オドモ」より劣勢である。「ワッチ」が東部四地にある。

3　中国事象がより優勢な状況

48　感謝辞

「近所の人から旅行のおみやげをもらった時のあいさつ」としては、中国地域の中部以西に分布する「タエガタイ」「タエガター」（耐えがたい）がもっとも広く分布していて、九州事象の「スミマセン」は六地に見えるばかりである。「タエガター」に追われたように西辺四地に分布している「オーキニ」は北九州市域にもある。下関市域・北九州市域では古いことばである。

18　百円分[3]

「百円ホド」、「〜ガホド」、「〜ガトコ」、「〜ガ」は中国事象、「ガソ」、「ガホ」は長門事象である。これらはほぼ全域に広がっている。一方、九州事象の「ガト」、「ガタ」、「ゴト」は関門海峡から東へ海岸沿いに分布している。

70　仏飯

中国事象の「オハチ」[4]あるいは「オハチサマ」がほぼ全地点に分

布し、北九州市域の、ことに豊前域に優勢な「オッパン」が海岸の二地に、「ウッパン」が一地に見える。「ブッパン」、「ゴブッパン」もそれぞれ二地にある。

79　手伝う

中国事象の「テゴースル」がほぼ全地点に分布し、九州事象の「カセースル」がこれと併存で十一地にあり、単存で一地にある。

(二)　九州事象の分布状況

九州事象が中国事象と拮抗し、あるいはより優勢に、逆に劣勢に分布する状況はすでに見たが、ここでは全域をほぼ被うもの、逆にきわめてまれな事象、〈少〉で優勢になる事象をとりあげる。

1　全域に優勢な九州事象

53　否定形式の問いに対する応答詞

外出先から帰宅した人に〝電話はかからなかったか〟と聞かれて、かかっていなかった時の返事は、「イーヤ（インニャ）カカランジャッタ」である。「ウン、カカランジャッタ」の返事も数地で答えられているが、この状況は北九州市域も同様である。日常には「イーヤ　〜」と言っていても、問われると迷って「ウン　〜」と答える話者もいる。九州と長門域の全般的な状況については、「応答表現法—長門方言における—」[(5)]をご覧いただきたい。

14　人に笑われる

併存で「ニ」を答えている地点も三地あるが、全地点に「カラ」が分布する。『方言文法全国地図』の「27　犬に追いかけられた」では、「カラ」の分布域は宮崎県南部と鹿児島、熊本、長崎、佐賀の諸県、山口県の豊関域である。私どもの調査では北九州市域にも「カラ」が分布しているが、下関市域のほうがむしろ優勢である。

69　十二月三十一日

「トシノヨサ」、「トシノヨーサ」、「トシノョ」、「トシノョノバン」、「トシノョル」でほぼ全域が被われている。中国域に優勢な「オーツモゴリ」類はわずか四地に見えるだけである。

70　つば（唾）

共通語の「ツバ」ほどに優勢ではないが、「ツズ」が九地に、「ツド」が六連島に分布している。『LAJ』の「118　つば」では、福岡・熊本両県域にはまれで、その他の九州諸県と山口県、島根県の石見地方に「ツズ」類の分布が見える。

2　分布量の少ない九州事象—残存と新入

「80　庭をはく」では、北九州市域の全地点分布事象「ハワク」が、多くは「ハク」と併存で九地に見える。市に隣接する豊浦郡や厚狭郡でも高年者は「ハワク」を言う。この図の全域にまばらな分布は残存の状況と思える。

一九九〇年に新しく調査した「飽きる」では、長門事象（新事象）「アケル」の優勢な分布に対して、九州事象（旧事象）の「アク」は、西がわに残存の状況を見せる。

「76　私にくれ」の「(私に)ヤレ」も西がわの五地に見えるが、これも残存のものであろうか。九州と向きあっていて、漁業などでの交渉もあった彦島・竹の子島、響灘沿岸、すなわち西がわの地域は九州域のことばを受け入れやすい。

「89　雨にぬれて気持ちが悪い」、「90　子供がさわいでうるさ

い」の両図には、「シロシー」が北九州市域では「雨にぬれて気持ちが悪い」の意であり、下関市域では「子供がさわいでうるさい」の意である状況が見える。もっとも下関がわにも「ヨーソケナイ」（ぬれて気持ちがわるい）と併存で「シロシー」を言う所が数地点あり、彦島の海士郷（アマノゴウ）と六連島（ムツレジマ）とは、89・90ともに「シロシー」である。

「87　仲間に入れてくれ」の図上には、九州事象の「カタラシテ」が、市の西北端の吉母（ヨシモ）と、九州と向き合っている竹の子島とに見える。

言語地図を微細に見ていく時、関門海峡と響灘とが市の方言状況の形成に大きな力を持っていたことがうなずかれる。

3　少年層で優勢になる九州事象

6　早い

〈老〉では「ハヤー」が優勢で、「ハエー」は「ハヤー」と併存で瀬戸内海がわの海岸一地に見えていた。〈少〉では中国事象の「ハヤー」は五地に、九州事象の「ハエー」が十一地に見えている。

9　起きろ

〈老〉ではかなり優勢であった「オキー　ヨ」、「オキー　ヤ」は〈少〉では少なくなり、〈老〉で三地に見えていた「オキレ」が二十一地に見えている。「オキレ」は西日本では九州事象である。

92　疲れて苦しい

〈老〉では中国事象の「エライ」（エラー）がほぼ全地点にあった。〈少〉では九州事象の「キツィ」が南部では単存で、北部では「エライ」と併存で分布している。

（三）　中国（中国四国）事象の分布状況

1　優勢な表現法事象

41　先生が言われた　42　先生が立っておられる

「ユーチャッタ」、「タッチョッテ」がほぼ全域を被い、併存して「ユーテジャッタ」が数地に、「タッチョッテジャ」が一地にある。

43　貸してください

中国事象の「ツカーサイ」が、まばらにではあるが全域に分布し、北九州市の筑前西部域に分布を広げている。

33　行かねばならない

「イカンニャー　イケン」が全域分布で、北九州市域の「イカニャ　ナラン」、「イカナ　ナラン」と対応している。

51　いい子、いい子（頭をなでながら言うことば）

「ホンソ　ホンソ」がおもな事象で、「ホンソゴ　ホンソゴ」（奔走子）、「ホンコ　ホンコ」もいくらかある。北九州市の豊前東部域にも分布を広げているが、中国四国に優勢な事象である。

2　優勢な語彙事象

60　お転婆

「ピンピラ」、「オッピン」がおもで「ピンピラハチ」もある。『中国地方五県言語地図』[6]によれば、周防東部に「キンピラムスメ」（金平娘）があり、その西がわが「ピンピラ」系事象域である。九州には広がっていない。

60　雨戸をしめる

全地点が「タテル」で北九州市域の「セク」と対応している。

82　寄りかかる

「スガル」が全地点分布で北九州市域の「ナンカカル」と対応している。この意味の「スガル」の分布地を『日本方言大辞典』は隠岐島、広島県比婆郡としている。

85　叱る

「クジョー　クル」がほぼ全地点にあり、「クジュー　クル」、「クジオ　クル」（公事をくる）もある。これらは北九州市域には見えないが、〝子供が食物や着物についてぐじぐじ不平を言う〟の意味で用いていたことを北九州人の筆者は記憶している。

88　なくなる

「食べてしまって（使ってしまって）なくなった」ことを「ミテタ」と全地点で言う。北九州市域にはまったく見えない。

93　歯が痛い

「ハシル」が全域にあり、「ウズク」と併存していることが多い。痛み方が違うという教示が多かった。北九州市域は「ウズク」専用である。『瀬戸内海言語図巻』[7]の212図で、これが山陽道中心の瀬戸内海域分布事象であることがわかる。

91　容易である

中国事象の「ミヤスイ」が全地点におおむね単存で分布、北九州市域には豊前一地にしか見えない。

（四）長門・豊関[8]事象の分布状況

1　優勢な表現法事象

49　うなずきの応答詞

相手の語りかけに「そうですか」とうなずく「ソレ　カナ」類が全地点分布である。山口県全域で聞かれるが、特に長門域で耳だつ。

16　誰の物（準体助詞）

「ダレノソ」、「ダレノホ」が併存して全地点に分布。代名詞「それ」を出自とする「ソ」、「ホ」は長門[9]分布事象であるが、北九州市域にも「ソ」、「ス」がいくらか見える。

36　どこに行くのか（文末詞）

準体助詞から転成した文末詞「ソ」「ホ」も全地点分布で、「ソカ」「ホカ」とも言う。北九州市域にもいくらかの分布が見える。

44・45・46・47の、あいさつことばに見える敬語

これらに見える「〜ナハンセー」、「〜ハンセー」、「〜ナンセー」は豊[10]関分布事象で、北九州市域筑前西南隅の「ナッセー」と対比的である。

45　訪問辞（親しい家を訪うて）

「（コレニャー）オリテガ　アル　カナ」（ご在宅ですか）というあいさつが四地にある。「オリテガ（居り手が）……」の訪問辞を諸文献の上でたしかめることができないが、豊関域分布事象のようである。

40　先に行く　ゾナ（文末詞）

文末詞「ゾナ」（ドナ）も全域分布であるが、かならずしも全地点で得られていないのは、話者が男性であるためである。女性がよく言う。『瀬戸内海言語図巻』の「97 ゾナ」の図によれば、これは近畿・四国が主分布域で、九州の豊前域と山口県下の豊関域にも分布している事象である。

2 優勢な語彙事象

73 稲むら

全域分布の「トシャク」は長門・石見分布事象である。九州豊前域分布の「トーシャク」と合わせれば、九州東北部と本州西辺部一帯に分布する事象である。

72 前庭

全域分布の「ホカ」は、豊関域を中心に、その周辺にも広がる事象である。[31]『LAJ』196図に、富山・岐阜以西、九州北部にまで連続して分布している「カド」は、私どもの調査では下関市域にはわずか三地に「ホカ」と併存で分布している。『LAJ』196図上にも、豊関域には「カド」の分布は見えない。

17 井戸

「イケ」が九地にある。『LAJ』197図上には、北陸・滋賀と、離れて山口県下の豊関域とに「イケ」がまとまった分布を見せている。私どもの調査では、彦島と東海岸域には「イケ」がなく、「イド」が分布して、新化の状況を見せている。なお、九州事象の「イガワ」が、西北端一地、東南端一地にある。

55 あの人 56 この人

豊関事象の「アノアンター」「アナンター」、「コノアンター」「コナンター」がほぼ全域分布であるが、九州と向きあっている彦島と六連島には見えない。北九州市域にもない。

58 親友

韓国語を受容した「チングー」（親旧）が全域に分布する。九州西部の海辺・島嶼から長門・石見の海辺・島嶼にかけて分布する事象である。「チングー」よりは弱勢力である「ヘコカエ」（褌替え）の分布域は豊関域とその周辺域であろう。

59 いたずらっ子

『中国地方五県言語地図』234図上、長門域分布状況を見せる「ドーゲンボーズ」類が全地点に分布している。東辺一地の「ドーカンボーズ」（童坊主）が本来の語形であろう。下関市域では〈少〉にもよく伝わっているが、北九州市域には〈老〉〈少〉ともに見えない。

66 舌

『LAJ』117図上に見える豊関事象の「ツバ」（舌）は、当然、下関市域でも優勢であるが、彦島と瀬戸内海がわの海辺には分布していない地点もある。

81 叫ぶ

「タッケル」が全地点に分布している。『瀬戸内海言語図巻』211図上には、「タケル」が主として西中国に分布し、九州北端二地にもある。「タッケル」は長門域分布事象である。私どもの調査では北九州市域に優勢な「オラブ」は、下関市域では「タッケル」と併存して五地に見えるばかりで、新事象「タッケル」がこれと交替した、あるいは交替しつつある状況を見せている。

3　音声事象

3　座ぶとん・2　風・4　雑巾

「ダブトン」、「ドーキン」のように、「ザ」を「ダ」、「ゾ」を「ド」に発音する状況は、彦島と瀬戸内海がわの海岸域とを除く地域にあり、「カジェ」・「カデ」のように「ゼ」を「ジェ」・「デ」に発音する状況は響灘がわに見られる。今回の調査ではこのような状況であったが、この発音傾向は長門域ばかりでなく、山口県全域にある。

(五)　沿岸・島嶼の飛石分布状況

「83　あぐらをかく」図上には、「アブタ　クム」が六連島と蓋井島、北九州市域の馬島に分布している。この調査では沿岸域には得られていないが、筆者は安岡でよく聞く。北九州市域には、沿岸域にも「アビタ　クム」、「ヒザブテ　クム」、「ヒラブテオ　カク」が得られている。

『LAJ』の「52　あぐらをかく」図上には、京都府・兵庫県・鳥取県の日本海がわ、そして隠岐島にこの類の事象がよく分布し、離れて山口県の見島、豊浦郡豊浦町、福岡県玄海町と、飛石状に三地に見える。私どもの調査では、この日本海事象が響灘・玄界灘の沿岸島嶼に、もう少し密に分布する状況が見えている。

「57　分家」には、関門海峡に面した伊崎町に「デミセ」があるが、この事象は『日本方言大辞典』に、新潟県佐渡、福井県、島根県鹿足郡とある。筆者はこれまでに萩市見島の浦集落(ミシマ)・相島(アイシマ)・大島、長門市青海島(オオミシマ)の大泊(オオトマリ)・大日比(オオヒビ)、下関市の竹の子島で、分家称あるいは分家屋号としてこの語を聞いている。

これらは日本海、響灘、さらには玄界灘の沿岸・島嶼へと飛石状に分布する事象であるが、瀬戸内海がわにもこの状況は見られる。

「68　ふくらはぎ」では「ワタモチ」、「アタモチ」が六連島と蓋井島、北九州市の藍島にある。下関市の本土域にはまったく見えないが、北九州市がわには筑前の沿岸域、ことに若松区の島郷(シマゴー)域にまとまった分布が見えている。この事象は『中国地方五県言語地図』219図上には瀬戸内海がわにまばらに分布が見えており、『日本方言大辞典』には「兵庫県赤穂郡・加古郡、山口県」とある。瀬戸内海の近畿・中国がわを飛石状に西進してきた事象であろう。

『瀬戸内海言語図巻』の「64　聞かなかった」の図上には、「〜ナンダ」が岡山・香川以来に多く見られ、広島県下、愛媛県下にもあって、内海西部にはほとんど見られない。私どもの調査でも、男性を対象者とした今回の調査では「〜ナンダ」は得られなかった。ただし、女性を対象者とした一九七六年調査[02]では、下関市の瀬戸内海沿岸の一地と北九州市門司区の一地、京都郡(ミヤコ)の一地でこれを聞いている。日常、筆者は下関市内の高年の女性からこれを聞くことがある。港町や漁業集落では飛石分布事象を聞くことがしばしばある。

「64　お手玉」では、蓋井島だけに「ジャーコ」がある。これは『LAJ』の「145　お手玉」図上、佐賀県域に見える「オジャッコ」「オザッコ」と関連する事象であろうか。

市の西北端と東南端のそれぞれ一地にある「イガワ」（井戸）は『LAJ』197図上では九州を主分布域とし、広島県下にもある。下

関市域の「イガワ」は、飛石分布、残存分布、いずれであろうか。

二　注目される諸事象

(一)　進行態の表現法

「37　子供が本を読んでいる」では、「ヨミヨル」（読みおる）の単存は九地、「ヨンジョル」（読んでおる）の単存は十七地、両事象併存は四地で、「ヨンジョル」は「ヨミヨル」より優勢である。また「25　(今)降っているようだ」の「フッチョル〜」と「フリヨル〜」のばあいもほぼ同じである。

この進行態の表現は『瀬戸内海言語図巻』の「50　雪が降っている」（進行態）では、「フリヨル」系事象が全域にあり、「フッチョル」は山口県下の大島、長島にわずかに見える。一方、これとほぼ同時期の調査結果を記した『九州方言の基礎的研究』[13]の「分布事象一覧表」によれば、九州南部には「フットル」「フッチョル」類が優勢であり、北部域も西がわには「フリヨル」類と「フットル」「フッチョル」との併存状況が見られる。下関市域の状況は瀬戸内海新化に遅れて九州と同似の状況を見せているものと考えられる。「〜ヨル」については、話者が「新しいことば」という説明を加えることが多かったこと、〈少〉では「ヨミヨル」が「ヨンジョル」より優勢であることも、これを傍証している。なお、「36　運動会がアリヨル」では、「〜ヨル」が全地点に分布し、「〜チョル」は八地に「〜ヨル」と併存で見えているにすぎない。これは九州のばあいも同様[14]である。

(二)　九州方言とのかかわりを考えさせる諸事象

さきに述べたように他称詞「アノアンター」、「コノアンター」類は豊関域分布事域である。この調査では得られていないが、下関市安岡には「アノマエ」[15]（あのお前―あの人）もあった。筆者は豊浦郡の阿川でこれを聞いている。『日本方言大辞典』では「アノマエ」は出雲にある。一方、長崎県・佐賀県の諸方言集には、「アノワイ」（あのわれ―あいつ）系他称詞が見える。すなわち「あの＋対称詞」を他称詞とする造語法が、九州の西部と本州西辺にある。造語発想上の同似性をここに認めることは無理であろうか。

さきに長門分布、あるいは豊関分布としてあげた「〜エン」（能力不可能）、「ホカ」（農家の前庭）、「チングー」（親友）などは、九州西部域、あるいは西辺域から本州西辺域への広がりを見せる事象であった。それらは、分布の見えない、あるいは分布の消えた福岡県域をはさんで連なる状況を見せている。

下関市域と九州西部域の方言の連なる状況は、下関がわから九州へ送り出したと見られる方言事象、たとえば「ゲナ（23　伝聞）」や「ツカーサイ（43〜てください）」の分布状況の上にも見られる。もっとも、「ゲナ」は宮崎県にもあり、「ツカーサイ」は筑前域にしか分布しないなど、九州内の分布状況はかならずしも単純でない。

一方、九州東北部域との分布の連続状況は、たとえば「40　ゾナ」（文末詞）の図上に見られる。「73　稲むら」の図上の九州豊前域の「トーシャク」と本州の長門・石見の「トシャク」も一つづきのものである。また長門事象の準体助詞、文末詞の「ソ」、「ホ」

はおもに豊前域に分布を広げている。もっとも、長門域ではこれが今日もさかんに用いられているが豊関域では衰えの状況にある。

このような分布状況の上からばかりでなく、表現法や語詞の上にも九州方言とのかかわりを考えさせるものが多い。親しい他家を訪う時の「45 オリテ（居り手）ガ アル カナ」（在宅かね）は九州では聞かないあいさつであるにもかかわらず、その表現形式は九州的である。また「31ナカルマイ（あるまい）」の「ナカル」は「アル」の語形に類推したものかもしれないが、九州において形容詞カリ活用のさかんなことに思い寄せられる。「ナカルミャー」を佐賀県域でも聞く。

「飽く」の活用の調査は一九九〇年度におこなったが、下関市域では「アケル」「アケン」が優秀で、「アク」「アカン」を西半域に追いやっている。すなわち五段活用の「アク」は共通語では上一段「アキル」に移っているが、下関市域（ばかりでなく長門全域）では下一段活用の「アケル」に移っている。この状況は九州で「落テル」、「降レル」のように上一段活用動詞を下一段に活用させる傾向のあることを思い出させる。

下関市域と北九州市域で同形異義の語のあることも興味深い。「シロシー」は、下関市域では「90 子供が騒いでうるさい」で答えられており、北九州市域では「89 雨にぬれて気持がわるい」で答えられている。北九州市域での用法のほうが原義であろう。この調査では聞いていないが、「タエガタイ」や「クジ クル」（クジョー クル）も、両域では意味が異なっている。

九州方言とのかかわりを考えさせる事象はこのようにさまざまである。

（三）その他、二・三のこと

1 近畿方言との近さを思わせる事象の「ゾナ（文末詞）」、「行かナンダ」（打消過去）についてはすでに述べた。「35 するな」（禁止）では「スンナ」が優勢であるが、「シンナ」、「シンナイネ」も計五地にある。女性を話者とした一九七六年の沿岸域調査[12]では、〈老〉・〈少〉ともにほぼ全地点で「シンナ」の類を聞いている。連用形利用のこの言いかたは近畿の「シーナ」を思わせるが、伝播の果てで語形を変えたもの、この地域で独自に造られたもの、いずれであろうか。ちなみに『瀬戸内海言語図巻』の「57 するな」の〈老〉図上には、大阪府・兵庫県の沿岸や淡路島に「シーナ」が見られ、〈少〉図上には長門域に「シンナ」が見えている。

2 「57 分家」では、下関市域には「ヘヤ」（部屋）、「ニーヤ」（新家）、「アタラシヤ」（新し家）、「シンヤ」（新家）、「シンタク」（新宅）、「デミセ」（出店）など多くの事象があって、北九州市域がほぼ「インキョ」（隠居）事象一色であるのと対照的である。分家事象がこのように多事象である理由を明かにし得ていないが注目している。

3 乳幼児をあやすことば「50 オランオラン バー」は、〈少〉では全地点が「イナイイナイ バー」に移っている。であっても少年者の日常語は「オラン」で、あらたまりことばとして「イマセン」を言う程度である。新語、新表現に移る時のこのような一傾向は、下関市域や北九州市域にかぎられたことではない。

三　新化の遅速―北九州市域の方言状況と比較して

西辺とはいえ本土域に位置する下関市域の方言状況は北九州市域のそれよりは新化の早いことがひとまず予想される。「33　行かねばならない」で、北九州市域が「〜ナラン」をよく残し、下関市域が「〜イケン」に移っているのは新化の早さをうなずかせる。五段活用の「飽ク」が北九州市域によく残り、下関市域ではこれが「アケル」に追われてわずかに西半域に残っているのなどもその一例である。語彙事象の中には下関市域までは分布が見えていて北九州市域には広がりかねているものも多いこともすでに見てきた。

これらは下関市域の方に新化の早いことを見せているものであるが、逆に下関がわの新化のゆるやかさを見せるものも多い。北九州市域には見られない能力不可能の「〜エン」を残し、「人カラ笑われる」のような「カラ」の用法を北九州市域よりはよく残していることにはすでにふれた。

助動詞「まい」の使用状況も、下関市域の新化のゆるやかさを見せる一例である。すなわち「30　行くまい」（打消意志）では、両域にともに「マイ」系諸事象がよく分布している。ただし、「31　あるまい」（打消推量）では、下関市域はほぼ全地点に「アルマー」を残し、「ナカルマー」も見える。北九州市域では「ナカロー」「ナイヤロー」を言う所が多い。

「26　行かなかった」では、下関市域に「〜ンジャッタ」が優勢、北九州市域には「〜ンヤッタ」が優勢である。また「34　そんなことをしてはいけない」では、下関市域は「シチャー　〜」であり、北九州市域には「シタラ　〜」が多い。

このように下関市がわの新化のゆるやかさを見せる図も多く、両域の新化の遅速は単純には言えない。〈少〉における共通語化はいったいに北九州市域の、ことに豊前域が早い。

おわりに

一九八九年調査の報告の一端として、まず下関市域の方言状況を見てきた。予想したことではあったが、その多様性と九州方言との深いかかわりにあらためて注目させられている。地図上の下関市の、二等辺三角形の頂点を北九州市に向け、その両辺に響灘と瀬戸内海の二つの海を持っている姿を見る時、このような方言状況をいかにもとうなずく。二等辺三角形のほぼ頂点の位置にある彦島地区、また響灘に面した西辺地域の分布状況はわけても興味深い。

調査報告としては、つづいて北九州市域の方言状況を明らかにした上で、両域を合わせ見る作業が残っているが後日を期したい。

注(1)　昭和53年度科学研究補助金研究成果報告書、国立国語研究所、一九七九

(2)　国立国語研究所、一九八一

(3)　『方言文法全国地図』52図、国立国語研究所、一九八九

(4)　『日本方言大辞典』には、島根県・山口県玖珂郡とあり、『広島県方言辞典』には大竹とある。

(5)　『日本文学研究』第二十五号、梅光女学院大学日本文学

会、一九八九

(6) 廣戸惇著、風間書房、一九六五

(7) 藤原与一著、東京大学出版会、一九七四

(8) 豊浦郡と下関市一帯を主分布域とする事象を豊関事象とする。

(9) 『方言文法全国地図』16図

(10) 「山口県日本海沿岸島嶼域の待遇表現法」、『日本文学研究』第十二号、一九七六

(11) 『日本言語地図』、国立国語研究所編、一九六七～一九七五

(12) 『山口福岡両県接境地域言語地図集』岡野信子編、梅光女学院大学方言研究ゼミナール発行、一九七六

(13) 九州方言学会、風間書房、一九六九

(14) 『九州方言の基礎的研究』の共同研究者にくばられた地図の中に、「アリヨル」の図もある。公刊されていない。

(15) 『安岡浦方言』、吉村次郎著、一九七六